

バリ島の伝統的緑地「テラジャカン」についての研究

—公共性と「かかわりの正当性」—

主査 菱山 宏輔^{*1}

委員 加藤 禎久^{*2}

本稿は、バリ島南部地域の道路沿いに存在する小規模緑地「テラジャカン」に着目し、その公共性を明らかにする。テラジャカンの生態学的特徴は、食用・薬草・祭礼時の供物等、多様な植物が植えられる点にある。さらに、その管理はテラジャカンが面する家屋敷の住民が担うものの、植物等の利用は住民以外の者でも可能であるというように、かかわりの重層性をもつ。本稿では、観光地として開発が進むプンリプラン村を事例として、コモンズ論における「正当性」の議論を参照し、テラジャカンにおける「かかわり」の拡大を明らかにする。展望として、市場化の影響により、社会生態学的な重層性と公共性が低減する可能性があることを提示する。

キーワード：1) バリ島, 2) 緑地, 3) テラジャカン, 4) 公共性, 5) 正当性, 6) コモンズ, 7) 観光

SOCIO-BIOLOGICAL RESEARCH OF TRADITIONAL GREEN SPACE 'TELAJAKAN' IN BALI

-Publicness and Legitimacy of Involvement-

Ch. Kosuke Hishiyama

Mem. Sadahisa Kato

This paper focuses on a small green space called "telajakan" in Bali to reveal its public nature. Telajakan is characterized by the diversity and functions of planted plants. The residents of the houses owning telajakan are responsible for its management, but non-residents can also use the plants. Referring to the discussion of "legitimacy" in the commons theory, this paper uses Penglipuran village, being developed as a tourist destination, to show that the socio-ecological layeredness and the public nature based on it may be reduced due to the impact of marketization, even though the involvement in the telajakan is expanding.

1. はじめに

本稿の目的は、バリ島南部地域の伝統的家屋敷の一部を成す小規模緑地「テラジャカン」(telajakan)の公共性と、その変容の特徴を明らかにすることである。テラジャカンは、塀で囲まれたバリ島の伝統的住居の外側、道路と住居の境目に位置する(図1-1)。一見、先進諸国にもみられるような街路園と同等のものに見えるが、その社会・文化的位置付けは異なるものである。第一に、テラジャカンの造成、管理は、テラジャカンが面する住居の住民によって担われるが、テラジャカンに生えている植物の利用は、外部の者に開かれているという特徴をもつ。第二に、テラジャカンに植えられる植物についていえば、面する住居の住民によって完全に自由に選択されるというよりも、バリ・ヒンドゥーの宗教的儀礼に用いられる草花、民間で用いられる生薬、料理に用いられる香辛料などが選ばれる傾向にある。そのため、多くの人が様々な目的でテラジャカンの植物を利用することにつながる。このような特徴を背景として、テラジャカン

には社会・文化的なゆるやかな公共性が働いている。同時に、特定の種類の植物だけが整然と植えられ厳密に管理されているというよりも、雑多な、高低様々な植物が、ある程度の大雑把さのうえにひとつの空間を形成していることも特徴である。



図1-1 プンリプラン村のテラジャカン

*1 専修大学人間科学部・教授・博士(文学)

*2 岡山大学グローバル人材育成院・准教授・Ph.D. (Ecological Planning)

しかしながら、現代において、テラジャカンの伝統的な特徴は変化している^{文1,2,3)}。テラジャカンの維持・管理の時間的・経済的余裕がなかったり、住居の敷地を広げるために、狭隘なもの、コンクリートで覆われているものがみられる^{文2,3)}。他方で、テラジャカンが存続されたり、刷新されるような事例もある。その際、植栽は、個人的な趣向による観葉植物、換金価値の高い植物が植えられることもある^{文2,3)}。政府による環境美化(蚊の撲滅)コンテストにおいて管理の徹底という面が評価されることで、公共性が失われることもある^{文2,3)}。

本項では同様に、観光との結びつきにおける刷新と変容に着目しながらも、さらに一步踏み込み、一定の公共性を持ちながら地域開発において中心的な役割を果たすテラジャカンの事例をとりあげる。もちろん、バリ島は早くからグローバル・ツーリズムの影響を受け、グローバル・キャピタリズムと結びつきながら、自然環境破壊や過剰な開発が進められてきた側面もある^{文4)}。その一方で、バリ島は観光を文化として取り込み、自らの伝統文化をより豊かなものにしたり、政治的に中央政府と渡り合う資源として活用してきた側面もある^{文5)}。そのようななか、筆者らの先行研究^{文2,3)}において明らかとなったテラジャカンの変容に加え、本項では、観光化のなかで刷新されるテラジャカンにおいて、公共性の特徴をいっそう明確にする意義がある。

本稿で扱う「公共性」とはどのようなものかを考えるうえで、次のような手順で論をすすめる。まず、先行研究において、比較的整備された緑地に関して論じられる「公共性」についての議論は、「現代的コモンズ論」といえ、本稿で扱う事例は、より古典的なコモンズ論の範囲であることについて論じる。次に、そこで論じられている、環境そのもの(生態学的側面)と共有するしくみ(社会学的側面)の両面をふまえながら、かかわりの「正当性」に注目する。その際、研究対象地区であるプンリプラン地区はグローバル・ツーリズムの影響を強くうける場所であることを説明変数として取り入れる。最終的に、「かかわりの正当性」がどのように変化しているのかを本稿の問いとして採用し、その問いに答えることで、改めて「公共性」について考察したい。

2. 先行研究と本稿の位置付け

ここでは、本稿における中心的な概念となる「かかわりの正当性」について明らかにするために、以下の順序で論を進める。まず、先行研究における「公共性」の観点を整理し、それらが「現代的コモンズ論」にあたることについて論じる。次に、それに対するより古典的なコモンズ論を参照するなかで、コモンズ論の二元性を相対化し、地域性や歴史性をふまえた「かかわりの正当性」に着目することの必要性について論じる。

2.1 緑地の公共性

平川^{文6)}によれば、緑地に関わる公共性は、管理のなかでその他の可能性の排除が累積し、公共性自体が揺らぎ、脱色されていくことがある。このときの「公共性」は、ハバーマスの議論が参照され、市民参加や公論形成、手続きの公共性という、近代市民社会の駆動原理のうえに位置付けられる。森下・山本^{文7)}は、公共緑地を「都市内において空地として存在することを目的とし、他の用途に用いられることなく確保された公園や緑地などの公共的な地域」と定義し、その機能が特定用途に収斂していないということが特色とされている。渡辺・宮本・雨宮・寺田・横張^{文8)}は、政治学の議論^{文9)}を参照して、公共空間を「公有民有に関わらず、職業や世代、価値観、ライフスタイル等が異なる住民間の直接的な行為や対話を通じたコミュニケーションの場」と定義する。これらの論者に採用されている「公共性」概念もまた、市民参加が念頭におかれているといえよう。

朴・飯田・横張^{文10)}は、都市公園における官民連携事業について論じる図式において「公共」と「市民」を両端におき、「公共」をほぼ「官」と同様に用いている。「公共性」については、「広く公に開かれた」という特徴があげられており、行政によって担保される公平性と換言できる。山田・浦田^{文11)}も同様に、「公共」については、公共事業や公共団体というように、行政の動きについて言及するなかで用いている。そのため、「公共的対応」とは、地方税の負担による民有緑地保全という動きをさすことになる。「公共性」としては「公開」や「地域資源の保護」について触れている。

行政と市民の両面に触れるものが、工藤^{文12)}による市民農園の公共性についての評価である。工藤は、斎藤^{文13)}による「公共性」についての定義を参照し、公的な制度として確立しているか、一般的な需要が存在するか、受益対象者の範囲、施設としての永続性という4つの指標を提示している。

以上のように、緑地に関する公共性の議論には市民と行政の間で着眼点が少しずつ異なるが、いずれも、歴史的・文化的・宗教的な要素への言及は見られない。むしろ、誰もが自由に参加できる無色透明な空間と、「負荷なき自己」が想定されている。宮内^{文14)}もまた、「市民による公共性を」という議論が、「のっぺらぼうで抽象的な『市民』や『地域』を想定しがち」であると論じている。それらをコモンズ論の立場から捉えると、「血縁的つながりや古くからの地縁的つながり、あるいは感情的なつながりという従来との関係を共有しない人びとが集住する空間にコモンズ的世界を構築すること」^{文15)}を主眼とする、「現代的コモンズ論」である。

これとは対象的に、本稿で対象とするテラジャカンについて論じる場合、その特徴の背景として社会文化的側

面をふまえる必要がある。例えば、空間的特徴をみると、テラジャカン道路と家の間に立地し、両者を媒介する役割をもつ。バリ島では、そのような中間領域が重要なものとされており^{文16,17)}、そのような社会文化的背景が、テラジャカンの資源としての性質を決める要素となる。

中間領域という点から先進諸国の状況をみると、公権力と私的領域とを媒介する公共圏が消滅し、公私が二元的に相互浸透するようになった後、現在では様々な領域において、両者を改めて媒介する中立的な領域、(共同的)公共領域に注目が集まっている。田中^{文18)}によれば、コモンズ論もそのひとつである。

以上をふまえると、特定の概念的立場から「公共」や「公共性」の特徴をとらえていくような研究手法ではなく、現場から、その共同的・重層的特徴を捉える必要がある。このとき、生物学者 G.ハーディンによる「コモンズの悲劇」論(1968年)をかわきりに、文理両面から論じられてきたコモンズ論がひとつの指針となる。

2.2 コモンズ論における「正当性」

コモンズとは何かについて、基本的にはふたつの視点が提示されてきた。高村^{文19)}は、ハーディンにはじまる「共有地の悲劇」論が、「過剰利用による劣化、維持管理の必要性、外部利用者の排除の困難性といった資源そのものの性質に注目」していること、もうひとつの視点である「コモンズの喜劇」論は、「資源を共同的に管理する仕組みや共同所有制度のことをコモンズ概念のコアに置いている」ことを峻別している。さらに、前者はコモンズのガバナンスについての条件やミクロ的な制度分析、後者は資本主義経済における市場化に対する原理的批判が

有用であると論じている。宮内^{文14)}も同様に「コモンズ」を、「共有財産としての環境」あるいは「環境を共有するしくみ」と表現している。

宮内^{文14)}はさらに、コモンズが扱う「公共性」について、「抽象的な『公益』ではなく、その地域の人びとにとっての、具体的で実効性のあるもの」とであると論じている。そのうえで、コモンズが重層的かつ動的なものであるため、「所有」と「利用」とをときほぐすなかで、権利・かかわりの正当性(レジティマシー)が何に基づいているのか、「地域性」、「当事者性」、「歴史性」など、それらの要件の濃淡や組み合わせについてみていく必要があるという。Berkerら^{文20)}もまた、悲劇と喜劇という二元論をのりこえるために、共有資源を「排除が難しく、共同利用が控除性(競合性)を含むような資源」と定義し、所有権とアクセスの点から、共同管理における正当性のあり方を重視している。こうした前提にたつことで、環境社会学におけるコモンズ論は、入会地としての林野、里山、水資源、漁業権などについて、管理・利用が公的・共同的(公共的)・私的な特徴をゆれうごくような動態が論じられてきた^{文14,21,22)}。

これらコモンズ論の観点を応用し、本稿では、テラジャカンの社会生態学的特徴と、管理・利用の特徴という両面をふまえ、公共的特徴を明らかにする。同時に、テラジャカンにおける「利用」の側面において、かかわりの正当性がどのように変化しているのかを明らかにする。以上の議論の展開を整理し、公共性と「かかわりの正当性」の位置付けを明示したものが表2-1である。

表 2-1 公共性と「かかわりの正当性」の位置付け

緑地に関する 先行研究		コモンズ論 としての分類	古典的コモンズ論に おける2つの視点	
公 共 性	市民参加	現 代 的 コモンズ論		
	行 政			
	市民+行政			
		古 典 的 コモンズ論	二 元 論	共有地の悲劇と喜劇
			非二元論	動的, 重層性 「かかわりの正当性」

3. 研究方法

2018年8月から9月にかけて、伝統的なバリの風景が残されている観光地区プルンプラン Desa Wisata Penglipuran にて、現地フィールドワークを行った。その際、(1)植生調査、(2)インタビュー調査、(3)アンケート調査の3点にとりくみ、データを収集した。続いて、

2019年8月から9月にかけて、全戸のテラジャカンの植生調査を完了させた。同時に、地区内を上部と下部に分節してその社会経済的差異を明らかにするために、対面式アンケート調査を行った。

植生調査においては、現地調査パートナーであるウダヤナ大学教授 Dewa Ngurah Suprpta, ウダヤナ大学講師 Anak Agung Ketut Darmadi とともに、テラジャカンの幅

員、植物の種類、用途（機能）についての計測・集計を行った。インタビュー調査については、プンリプランの現在のテラジャカン開発において、主要な役割を果たした人物N氏に2時間におよぶ聞き取りを行った。加えて、従来の研究から引き続いての調査として、研究調査対象地区であるプンリプラン内を三つの区画に区分したゾーンサンプリングを行い、対象者に30分から1時間のインタビューを行った。

アンケート調査として、プンリプランの目抜き通りに面した伝統的な家屋敷73軒の家帯主を対象としてアンケート調査を実施、62軒から有効回答を得た。その後、インドネシア語のオープンアンサー項目の翻訳作業、調査票のコーディング、統計解析ソフトへの入力作業を行った。それらを利用し、(1)社会経済的地位とテラジャカンの生態学的特徴の関連、(2)利用主体の正当性（誰が包摂され、誰が排除されているか）についての評価が、テラジャカンの古典的特徴と比較してどのように変化しているのか、(3)それらは、テラジャカンの機能、テラジャカンの管理の情報源（知識）についての評価とどのように関連しているのかについて分析する。さらに、インタビュー調査と文献研究によって、テラジャカンをめぐる正当性の歴史的变化を通時的に明らかにする。

4. 研究対象の概略

4.1 テラジャカンの特徴

テラジャカンとは、バリ島の伝統的な家屋を囲う壁と道路との間に設けられた緑地の名称である。テラジャカンが路地に沿って続く景観は、バリ島住民のアイデンティティのひとつとされ^{文 23)}、ただの緑地というだけではない、独自の社会文化的機能・意義をもつものである。すべてのテラジャカンは、道路に面した各々の家屋敷の住民により設置・管理されており、家禽に日光浴をさせる場所、収穫した米や荷物の類を一時的に置いておく場所として用いられてきた^{文 24)}。植えられる植物は民間医療や料理のスパイスとして用いられ、果実は市場で売られたりと多様な用途が想定されてきた。これら私的用途と同時に、次のような諸特徴がテラジャカンの公共的（コモンズの）な側面をなす。

テラジャカンには宗教的祭礼時に用いられる椰子の木、プルメリア、チュンパカといった植物が植えられ、村の祭礼時には、テラジャカンの所有者のみならず近隣住民がそれらを自由に用いることができる。さらに、地域住民どうしが会話をする場所、かつては馬や馬車などの交通手段が停留される場所、朝夕に行商人が荷物を下ろして商売をする場所とされてきた^{文 24)}。以上のように、私的に供給・管理されながらも社会的・公共的な機能をもつテラジャカンは、「社会の相互作用や活動を調整する場所」^{文 24)}であり、バリ島の宗教文化と、テラジャカンを介

した住民の相互のかかわりにもとづいている。これらの特徴のいくつかは、現在でもなお見ることができる。例えば、図4-1、4-2はテラジャカンの花を祭礼用に採集する様子であり、しかも、テラジャカンが面する家屋敷の住民以外が採集していることに特徴がある。図4-3、4-4は、村内の宗教儀礼に際して、子供たちがテラジャカンで食事をしたり、話をしたりする様子である。



図 4-1 供物用の花を採集する様子(1)



図 4-2 供物用の花を採集する様子(2)



図 4-3 テラジャカンでくつろぐ様子(1)



図 4-4 テラジャカンでくつろぐ様子(2)

以上のように、現代でも古典的な機能の具体例を垣間見ることができるが、大きく変容をとげている面もある。特に都市部では、生活の近代化のなかで、家屋敷をより大きくしたり、自動車用の出入り口を設けたりする過程においてそのスペースが削られるか、残されるとしても商品化され審美的な機能のみが残されるようになった^{文 1, 2)}。

4.2 プンリプラン村の空間構成

プンリプラン村はバリ島に古くから存在する村に典型的な空間的特性を残す^{文 25)}。村の中央には南北方向に一本の道がとおり、北は高度が高く山の方角(kaja/ulu)、南は高度が低く海の方角(kelod/teben)となる。道の北端には誕生を司る寺があり、中央部分に住宅地区、南端には死を司る寺と墓地が設置され、それぞれの部分が頭・身体・足、あるいは誕生・成長・死、さらにブラフマ・ヴィシュヌ・シヴァという三神を意味する。中央部分の住宅地区に位置する各住宅は、山と海によって結ばれる南北方向に直行するように、東西(kangin - kauh)に細長くつくられている。

この南北に貫く目抜き通りに面した 76 軒それぞれの家主とその家族は、村の正式な成員とされる。それ以外の地区に住む付属的な成員とは異なり、例えば、寺院の役職につくことができ、火葬を行う際により多くの提供物が求められる等の義務・役割をもつ^{文 26)}。この目抜き通りがプンリプランの観光村としての景観をかたちづくり、地域開発の舞台となってきた。

このような空間構成は、観光客の移動の流れにも影響している。観光用の駐車場は、村のほぼ中間部分につくられており、観光客はそこから歩いて目抜き通りに入った後、見晴らしがよくテラジャカンの面積も広くとられている北側に集まる傾向にある。

5. 調査結果と考察

5.1 社会経済的状況と空間構成

基礎的項目について明らかにする。プンリプランの世帯主の平均年齢は 50.9 歳(中央値 49 歳)である。職業は農業が最も多く 48.4%, 次いで商業 12.9%, 公務員 11.3%, 自営業 11.3%である。商業、自営業の場合、そのほとんどはプンリプラン地区内での就労である。農業従事者の年齢の平均は 53.2 歳、それ以外の職種は 48.8 歳と、農業従事者は比較的高齢である(t 検定において 10%水準で有意)。最終学歴をみると、中学卒業以前が 32.3%, 高校卒業が 37.1%, それ以上が 30.6%である。

インドネシアの 2016 年 8 月時点での月平均所得は 2,552,962 ルピア(BPS 2016)であり、これに 12 を乗して得ることができる概算の年間所得は約 3,064 万ルピアである。これと比べ、プンリプランの平均年収(有効回答数 49)はおおよそ 1,800 万ルピアであり、国の平均の 6 割ほどの収入のなかでテラジャカンが維持されている。ただし、上位 10%の年収は 4,800 万ルピアから最高で 6,200 万ルピアほどであり、地区内の格差が存在する。

農業従事者とそれ以外の職種において年収を比較すると、農業従事者は約 1,050 万ルピア、それ以外は約 2,350 万ルピアと大きく開きがある(t 検定において 1%水準で有意)。

プンリプラン内の上下の空間の差異を明確にするために、2019 年 9 月に最上部と最下部それぞれ 12 ケースずつのサンプリングを行い、観光収入について聞き取りを行った。上部では、平均 99 万ルピア、中央値 75 万ルピア、下部では平均 133 万ルピア、中央値 30 万ルピアであり、0 と回答した数は上部が 1、下部が 5 であった。平均では下部のほうが観光収入がより多いようにみえるが、中央値をみるとばらつきがあることがわかり、観光収入が無い家も多い。このことから、上部のほうが観光により力をいれている、あるいは観光客が多いということがわかる。

5.2 植生調査

植生調査では、ランダムサンプリングにより 6 箇所を抽出し、種数、それらの機能、各種の個体数、全個体数、幅、面積を明らかにした。各種機能を一覧にしたものが図 5-1 である。ここからは、審美機能が圧倒的に支持され(植栽されているすべての植物種が審美機能を有する)、次いで宗教儀礼機能、薬用であることがわかる。さらに、機能の多様性と種の多様性は関連があることが判明した。

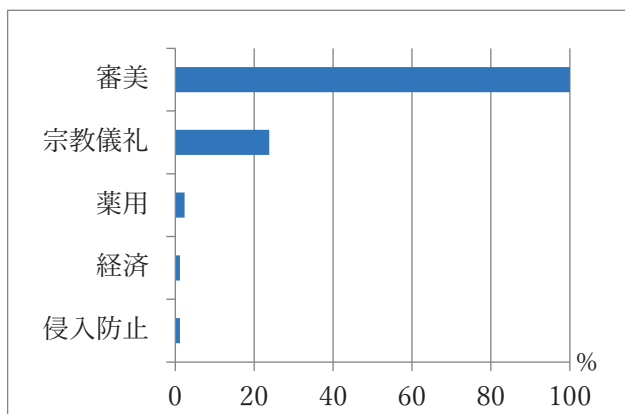


図 5-1 テラジャカンの植物の機能

次に、植生の種数とテラジャカンの面積との関係を表したものが図 5-2 である。種の多様性とテラジャカンの面積との間には正の相関がみられた（相関係数 0.67）。つまり、面積が大きいほど、多くの種が植えられている。全個体数（各種の個体数の合計）とテラジャカンの幅との間にも正の相関がみられた。

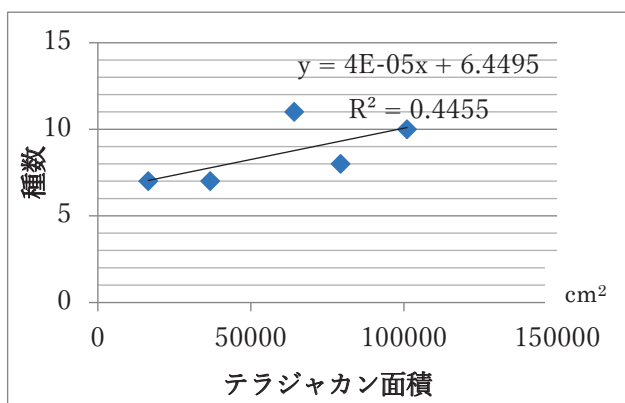


図 5-2 品種を区別した植生種数とテラジャカン面積の相関

種の多様性と世帯収入と家主の学歴との相関については、サンプル数が少なくはっきりとした結果は得られなかったが、暫定的に次のように結論づけた。全体の傾向として、家主の最終学歴が世帯収入と正の相関関係があると仮定すると、種の多様性は世帯収入と正の相関関係がある。しかし、種の多様性は、おそらくテラジャカンの面積が最も関係している。つまり、面積が大きいほど、種の多様性は高い傾向にある。

5.3 テラジャカンの管理と利用

ここでは、テラジャカンの管理と利用の状況を明らかにする。テラジャカンにおける管理（所有）と利用のずれは、宮内¹⁴⁾がいう「重層的なコモンズ」、「あいまいなコモンズ」の特徴を成す。以下、アンケート調査の結果に従って、その詳細を明らかにする。

テラジャカンの管理は誰が担っているかについて、最も主要な管理者、2番目の管理者、3番目の管理者というように、順位づけを行って質問した。この結果を点数化するために、それぞれ3点、2点、1点として主体ごとに合計点を算出した（図 5-3）。その結果、世帯主本人が管理する場合がほとんどであり、妻、子供、その他家族・親族というように、テラジャカンはそれが面する家屋敷の住人によって維持・管理されている。それらに次いで、比較的少数であるが「相互扶助」があげられている。ここでいう相互扶助は、インドネシア語で「ゴトン・ロヨン」と呼ばれ、街路の掃除や補修、生活全般の諸問題等に集会的に対応する慣習上の相互扶助活動である。近年、バリ島では都市化の影響をうけて実働としてのゴトン・ロヨンが減少し、それに代わって金銭を拠出するという傾向がある¹⁷⁾。プンリプランでは、テラジャカンの管理にゴトン・ロヨンがみられ、テラジャカンをめぐる管理の正当性に家族をこえた集合性が一定程度寄与していることを見出すことができる。

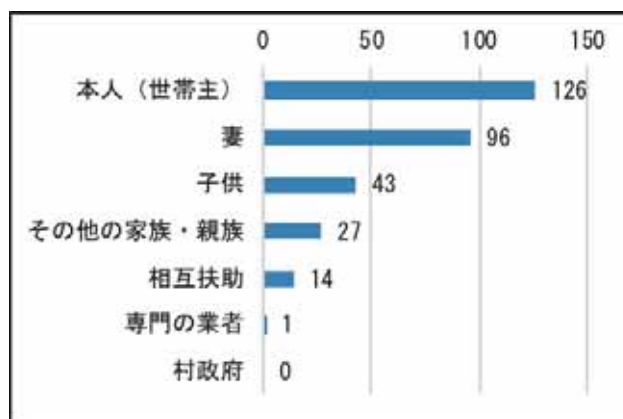


図 5-3 管理者ごとの得点

利用範囲をみると（表 5-1）、家族が 95%、広域には同じ村落内までが 80%台、それより広くなると 40%台となり、村落の内と外の利用に壁がある状況である。ただし、観光客においては 50%台であり、「他の村の住民」（43.9%）よりも高い割合である。この点で、かかわりの正当性は村落内部に閉ざされつつも、観光化が進むなかで、観光客という外部の者のかかわりを可能としている。

表 5-1 テラジャカンを利用するアクターについて「1. 自由に利用して良い」を選択した回答者数と割合（問 17）

利用するアクター	回答者数	割合
a. 家族	54	94.7%
b. 同じ通りに住んでいる人	46	80.7%

c. 同じバンジャールの人	47	82.5%
d. 同じ村の人	47	82.5%
e. 他の村の人	25	43.9%
f. 他の島の人	25	43.9%
g. インドネシア人観光客	31	54.4%
h. 外国人観光客	29	50.9%
合計	57	100.0%

5.4 情報源にみる近代化

情報源（表 5-2）については、ほとんどの場合、自分の考えをもとに整備を行っており（83.1%）、ついで、家族の意見が参照されている（69.5%）。テラジャカンはあくまで個人とその家族によって管理されていることがわかる。同時に、半数以上（66.1%）がバンジャール（町内会）およびデサ（村落）において行われた会議の決定を重視しており、一定の共同性も見出される。もっとも、その共同性は、宗教文化と住民同士の日常的な相互のかかわりに基づく古典的な公共性とは異なるものである。そのことは例えば、テラジャカンの物的構造や植栽を規定してきたロンタル（古文書）^{注1)}やバリアン^{注2)}を参照している住民がほとんどいない（5.1%、3.4%）という点に現れている。そうした古典的な知識よりも、マスメディア（40.7%）、インターネット（33.9%）、専門家の意見（40.7%）がより重視され、近代化が進展している。

表 5-2 テラジャカンを整備するうえで参照する情報源について「1. 重視する」を選択した回答者数と割合（問 16）

情報源	回答者数	割合
a. 自分の考え	49	83.1%
b. 家族の意見	41	69.5%
c. 隣住民の意見	16	27.1%
d. 友人の意見	18	30.5%
e. バンジャールの会議の決定	39	66.1%
f. デサの会議の決定	39	66.1%
g. テレビやラジオなど マスメディアの情報	24	40.7%
h. インターネット上の情報	20	33.9%
i. 大学の先生など専門家の意見	24	40.7%
j. 造園業の店員の意見	14	23.7%
k. バリアンの話	2	3.4%

1. ロンタル	3	5.1%
回答者数	59	100.0%

5.5 テラジャカンに期待する機能

テラジャカンの機能評価についていえば（表 5-3）、個人の楽しみという特徴についてはそれほど重視されておらず（69%）、むしろ観光客やイベント向けの特徴が重視される傾向（80%台）にある。同時に、伝統文化としての側面、自然保護の側面も重視され（80%台）、この点で公共性をもつといえる。しかしながら、より具体的な宗教儀礼（60-70%台）や、遊び場（25%）というような日常的な機能については回答割合が比較的低い。このような傾向について、バリ島が観光と伝統文化を融合させて独特の観光文化^{文5)}を形成してきたことに加え、より抽象的な自然環境という近代的な価値観も影響していると考えられる。換言すれば、テラジャカンに古典的にみられたような身近な公共性と異なり、観光の側面、あるいはより抽象的な価値観に依拠した正当性があらわれている。

表 5-3 テラジャカンの特徴について「1. とても重要である」を選択した回答者数と割合（問 18）

テラジャカンの特徴	回答者数	割合
a. 個人の楽しみ	38	69.1%
b. 観光客の楽しみ	46	83.6%
c. 家の宗教儀礼のため	42	76.4%
d. 村の宗教儀礼のため	34	61.8%
e. イベントのため	44	80.0%
f. バリ島の伝統文化の維持	45	81.8%
g. 自然環境保護	49	89.1%
h. こどもの遊び場として	14	25.5%
i. 近隣住民との会話のテーマ	20	36.4%
合計	55	100.0%

テラジャカンの現状として、観光資源として機能が限定される方向性と、「自然環境保護」や「バリ島の伝統文化」というような普遍的価値が投影される方向性との両者が見出されることが判明した。現代のテラジャカンにおける公共性は、日常的・個別具体的なかかわりに依拠しながら保持されるような古典的な公共性の段階から、観光と普遍的価値の間を制度的に埋め合わせようとする新たな公共性の段階へと転換しているといえる。

6. テラジャカンの通史的把握

6.1 花の村への転換点

現在のブンリプラン村のテラジャカンは、多くの観葉植物であふれている。そのようなテラジャカンの開発に主要な役割を果たしたN氏は、ジャワ島出身の起業家である。筆者らは2018年9月に、N氏、村の観光部局の担当者、村長らを対象としてインタビュー調査を実施した。N氏はまず2015年に、すべての家庭に無料で一年草の観葉植物を配布した。さらにその年末、ブンリプラン・バルブンガ（ブンリプランに花があふれる）というイベントの開催を主導した。それと同時に、N氏は、ブンリプランへと続く道路沿いに植物園を開き、植物の生育・販売を行い、ブンリプランの住民を従業員として雇用した。

このような一連の動きについて、住民からは、ブンリプランが新たな観光地として発展していることを肯定的に評価する声が聞かれる。他方で、第2回以降のイベントの開催のためには、住民が自己負担によりN氏から植物を購入する必要があること、村全体の歩調をあわせるために住民はその負担を強いられていると感じるようになったことについて、疑念を呈するような意見も聞くことができた。

このように、ブンリプランのテラジャカンには、観光資源として観葉植物が導入された。それと同時に、貨幣経済の浸透、観光とのより密接なつながりが構造化された。テラジャカンが従来もっていた公共性は、日常生活世界にもとづくというよりも、観光開発と市場経済によって特徴付けられる側面を強くする傾向にある。

そのような傾向についてのもうひとつの事例が、ブンリプラン村独自の空間であるカラン・ムマドゥ Karang Memadu の開発をあげることができる。バリ島では慣習的に、一夫多妻が認められる村が存在するが、ブンリプランでは禁止されてきた。その禁を破った者は、村の南端に位置するカラン・ムマドゥに追放され、そこに住まわなくてはならない。もっとも、何か特別な建物や遺跡があるわけではなく、2017年までは名前と由来が書かれた立て札が掲げられた空き地でしかなかった。それが、2017年から2018年にかけて大きく変容し、石畳により舗装され、花壇が造成され、木の椅子と机も設置された。ところどころに、植物の苗を育てる植木鉢が並べられた(図6-1)。敷地の奥にはコーヒーを飲むことができるカフェがオープンした(図6-2)。村の議会で決定された開発であるが、その開発にも、N氏からのアドバイスと植物が活かされることになった。

このように、慣習にもとづくとはいえ長らく使用できなかった(むしろ使用が憚られた)空間が、観光開発の一環としてブンリプランに浸透した緑地化という手法の導入により刷新され、南側地区への人の流れを生み出すとともに、テラジャカンに植える植物を育成する場所と

しても再評価されるようになった。



図 6-1 緑地化されたカラン・ムマドゥ



図 6-2 カラン・ムマドゥ内のカフェ

6.2 テラジャカンの設立時期と公共性の変容

ブンリプランのテラジャカンが観光に資するように整備されはじめたのは、比較的近年のことである。筆者らはアンケート調査において、テラジャカンについて知っていることを自由に書いてもらう欄を設けた。その結果、設立時期に関して、比較的遠い過去に遡る回答が27ケースであった(「昔から」「生まれる前から」「代々保管してきた」「45年前」「村ができると同時に」「観光化される前から」等)。他方で、その設立を1990年前後とする回答も一定数あった(10ケース)。

観光化が全く進んでいない隣村(テラジャカンの兄弟村と呼ばれる)にテラジャカンが存在することから、ブンリプランにも比較的以前からテラジャカンが存在すると考えることができる。他方で、現在のように観光に直接的につながるようなテラジャカンの整備は、1991年に遡ると考えられる。当時、インドネシアの総選挙をうけてスハルト大統領が村を訪れるということで、村びとは自前で目抜き通りとそこに面した屋敷の門を整備し、通りは石畳となった²⁶⁾。大統領の訪問はかなわなかったが、これをひとつの契機としてブンリプラン村は政府観

光局の「総合観光村」に選出された^{文26)}。村長や村の観光開発者へのインタビュー結果を総合すると、テラジャカンもこのとき改めて整備されたが、現在の審美的な特徴を目的とするものとは異なり、壁と水路の間に空間をとり、壁が水流に侵食されないようにするためのものであった。その後徐々に、地元の宗教儀礼において利用するための草花が植えられていったという。

以上をふまえると、プンリプランのテラジャカンは3つの段階を経たといえることができる。第一に、古くは、テラジャカンのより古典的な特徴を有する段階である。ここでその機能は多様であり、利用者は村人に限られていたと考えられる。テラジャカンの管理は個人であっても、バリ島の宗教文化がかかわりの正当性の基軸をなし、テラジャカンの社会生態学的機能に一定の方向性をあたえていた。

第二に、外部からの影響（大統領訪問：1991年）を契機として、観光村へとつながる段階である。ここでテラジャカンは、道や壁といったインフラの整備に付随し、それらを風雨による損傷から保護するための緩衝地帯としての機能に集約されることになる。いわば、テラジャカンのグレーインフラ化である。ここでは、かかわりの正当性は、大統領訪問やそれに続く観光開発という、目的合理的な価値の延長にあるにすぎない。テラジャカンにかつて存在した宗教文化的な価値は減退し、近代化によってテラジャカンの道具的価値が前面に押し出されるようになった。換言すれば、グレーインフラ化によってテラジャカンの古典的特徴が一定程度相対化されることで、続く観光開発に適合的な空間が準備され、漸次的に観葉植物が植えられていくことになり、続く第3段階への転換を可能としたといえる。

テラジャカンの変化の第3段階は、2015年以降、外部の投資家の影響をうけながら観光に資するものとして積極的に観葉植物が植えられ、現在に至る段階である。ここでテラジャカンは、観光のためのグリーンインフラとして活用されている。この段階では、集合性・共同性（デサからの情報の重視、伝統文化や自然保護の機能の重視）がみられること、植物の自由な利用がみられること、利用者についての包摂（観光客の受容）が広がりを見せていることに、テラジャカンの古典的な特徴である「共同性」が今日的な文脈で再興している。すなわち、この段階では、第2段階のグレーインフラ化のなかでは生じ得なかった新たなかかわりの正当性が、観光客にまで広がる状況に至っている。

7. おわりに

改めて議論を整理したい。プンリプランの社会経済状況をみると、農業を主とした就労が大半であり、全体としては低収入であるが、観光収入をみると目抜き通りの

上部地区ではより収入の機会が多く、下部ではばらつきがあった。植生調査からは、面積、種数、個体数の相関がみられ、種数は世帯収入と正の相関がある可能性が高く、これらの基礎データから、現在のプンリプラン内部に社会生態学的、社会経済的な差異が生じている可能性がある。

続いて、管理、利用、情報源、機能の四つの側面から、テラジャカンの正当性の諸要素について明らかにした。管理においては、基本的に家族によるが、相互扶助もみられ、集合的な管理の正当性の存在が明らかとなった。利用は多くの場合、同じ村までとされ、それ以上の広域的なかかわりは排除される傾向にあるが、さらに広いかかわりとして観光客の包摂がみられた。テラジャカンに関する情報源をみると、村の会議等、共同体を基盤としてシェアされる情報を重視する傾向があるが、伝統的な知識については関心が低下し、近・現代的な情報手段を重視する傾向が明らかになった。テラジャカンに期待する機能については、伝統文化としての側面が重視されつつも、観光の側面、自然環境保護というようなより抽象的な価値観がいつそう重視され、宗教儀礼など身近な機能については比較的低い値となった。

全体として、村のまとまりが主軸でありつつも、テラジャカンの慣習的・宗教的要素は相対的に減退しており、代わって、観光化の影響、近代化の影響がより強くみられる結果となった。ただし、そのことがすぐにかかわりの正当性の減退に結びつくわけではなく、むしろ、テラジャカンのグレーインフラ化を経たグリーンインフラ化により、新たなかかわりを可能としているといえる。

とはいえ同時に、観葉植物の栽培が常態化し、入手ルートが固定化するかたちでテラジャカンの市場化が展開しており、カラン・ムマドゥの緑化が端的にそれを示している。この点では、テラジャカンをめぐる今後の緑化が、文化を覆していくような文化的ジェントリフィケーション、グリーンジェントリフィケーションの傾向をみせる可能性もある。あわせて、この側面が強まりつつも維持管理については引き続き家族単位で担うような場合、住民の社会経済的な地位がテラジャカンの特徴に反映され、社会経済的な分断を強める可能性がある。

それらを乗り越えていくようなポテンシャルがどのように生み出されるのか、バリ島社会が培ってきた観光文化のダイナミズムとどのように接続されるのかについては、今後の研究がまたれるところとなる。

<注>

- 1) ロンタルとは、ヤシ (*Borassus Flabelliformis*) の葉を加工して作った貝葉であり、パンルパ pangrupak と呼ばれるナイフのような道具を用いて書かれた古文書である。その内容としては、ヒンドゥー教の教え、天文学、言語学、詩

歌文学、歴史、芸能、医療などを含み、バリ語、古代ジャワ語、スンダ語、サンスクリット語などによって記されている文²⁷⁾。テラジャカンに關係するロンタルは、伝統的家屋敷の建造について記されている『アスタ・コサラ・コサリ』と、植物の効用に関して記された『ウサダ・タル・プラマナ』である。テラジャカンがバリ島の伝統文化に基づいているほど、このようなロンタルの内容が反映される可能性が高くなると考えられる。

- 2) バリアンとは、呪医師あるいはシャーマンのバリ島における呼称である。その役割は、人生相談からはじまり、病気の診断、調剤と処方、マッサージ、宗教儀礼、降霊、宣託など多岐にわたる^{文²⁷⁾}。テラジャカンとの関わりという点では、テラジャカンの管理の仕方、そのために必要な儀式、植えるべき植物、それらに関わる吉凶についてのアドバイスを求めることになる。テラジャカンがバリ島の宗教文化に結びついているほど、テラジャカンを管理する者はバリアンのアドバイスをあてにする可能性が高いといえる。

<参考文献>

- 1) Ida Bagus Brata : Commodification of Telajakan at Ubud Village, Gianyar, Bali, E-Journal of Cultural Studies, Vol.7, pp.1-6, 2014
- 2) Kato, S. and Kosuke Hishiyama, Anak Agung Ketut Darmadi, Dewa Ngurah Suprpta : Changing Roles of Traditional Small Urban Green Spaces (Telajakan) in Bali, Indonesia, Open Journal of Ecology, Vol.7, pp.1-11, 2017
- 3) Kato, S. and Kosuke Hishiyama, Anak Agung Ketut Darmadi, Dewa Ngurah Suprpta : Functional Analysis of Telajakan Plants and Space in Northern Denpasar, Bali, Indonesia, Open Journal of Ecology, Vol.9, pp.15-24, 2019
- 4) Lansing, Stephen : Perfect Order: Recognizing Complexity in Bali, Princeton:Princeton University Press, 2012
- 5) Picard, Michel, 1996.BALI: Cultural Tourism and Touristic Culture.Singapore:Archipelago Press.
- 6) 平川全機 : 継続的な市民参加における公共性の担保-ホロヒラみどり会議・ホロヒラみどりづくりの会の6年, 環境社会学研究, Vol.11, No.0, pp.160-173, 環境社会学会, 2005
- 7) 森下英治・山本佳世子 : 東京都における公共緑地整備に関する研究-公共緑地分布からみた地域防災性評価をもとに, 環境化学会誌, Vol.12, No.2, pp.145-157, 1999
- 8) 渡辺陽介・宮本万里子・雨宮護・寺田徹・横張真 : カシニワ制度に基づくコミュニティガーデンにおける公共性の変化, ランドスケープ研究, Vol.77, No.5, pp.713-718, 2014
- 9) 篠原雅武 : 公共空間の政治理論, 人文書院, 2007
- 10) 朴柄昊・飯田晶子・横張真 : 都市公園の運営における官民連携事業の公共性及び収益性に関する研究-千葉市豊砂公園パークマネジメント事業を事例に, 都市計画報告書, Vol.16, pp.182-187, 公益社団法人日本都市計画学会, 2017.8
- 11) 山田和司・浦田啓充 : 民有緑地消失の現状と原因の検証に関する研究, ランドスケープ研究 : 日本造園学会誌, Vol.64, No.5, pp.871-874, 日本造園学会, 2001.3
- 12) 工藤豊 : わが国における市民農園の史的展開とその公共性, 日本建築学会計画系論文集, Vo.74, No.643, pp.2043-2047, 2009.9
- 13) 斎藤純一 : 公共性, 岩波書店, 2000
- 14) 宮内泰介 : レジディマシーの環境社会学-コモンズをささえるしくみ, 新曜社, 2006
- 15) 菅豊 : 現代的コモンズに内在する排除性の問題, 大原社会問題研究所雑誌, Vol.655, pp.19-32, 2013.5
- 16) Eiseman Jr., Fred B. : Bali: Sekala and Niskala: Essays on Religion, Ritual, and Art, Tuttle Publishing, 1989
- 17) 菱山宏輔 : 都市コミュニティの陥穽から多元性へ-バリ島の境界領域からの考察, 都市社会学会年報, Vol.36, 39-56, 2018.9
- 18) 田中重好 : 地域から生まれる公共性-公共性と共同性の交点, ミネルヴァ書房, 2010
- 19) 高村学人 : コモンズからの都市再生-地域共同管理と法の新たな役割, ミネルヴァ書房, 2012
- 20) Berkes. F. (ed.) : Common Property Resources. Ecology and Community-based sustainable development, Belhaven Press, 1989
- 21) 飯島伸子・鳥越皓之・長谷川公一・船橋晴俊 : 講座環境社会学〈第1巻〉環境社会学の視点, 有斐閣, 2001
- 22) 三俣学・井上真・菅豊 : ローカル・コモンズの可能性-自治と環境の新たな関係, ミネルヴァ書房, 2010
- 23) Yudiantini, Ni Made : Natah and Telajakan: The Role and Identity in Indigenous Villages, Proceedings of International Seminar on Place Making and Identity, 179-187, 2012
- 24) Dwijendra, Ngakan Ketut Acwin: Rumah Tradisional Bali, Udayana University Press, 2008
- 25) Dwijendra, Ngakan Ketut Acwin : Arsitektur & Kebudayaan Bali Kuno, Udayana University Press, 2009
- 26) 山下晋司・鏡味治也 : バリ島ブリンプラン村観光開発の最前線, 民俗学, Vol.73, pp.100-107, 1995
- 27) 菱山宏輔 : バリ島の伝統的呪医「バリアン」の諸類型と診療技法, 人間科学論集社会学篇, Vol.11, No.2, 2021年3月発行予定

<研究協力者>

Dewa Ngurah Suprapta ウダヤナ大学教授

Ngakan Ketut Acwin Dwijendra ウダヤナ大学教授

Anak Agung Ketut Darmadi ウダヤナ大学講師